ひかりのこ　隣人を自分のように愛しなさい。　1992年12月25日　第 44 号

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480－72－3883
振替／東京3－128022
印刷／(株)ドモン企画

絵・中島　英子

クリスマス

矛盾の中で

（マタイによる福音書 第二章十六～十八節）

理事長　福島　勲

楽しいクリスマス物語の陰に見忘れがちなことは、二才以下のエルサレムの男の児たちが、ヘロデ大王によって惨殺された悲しい出来事である。まことに痛ましく不憫この上ない悲しい物語である。

果たして、子どもたちの両親の幾人が、これがキリストの誕生のために、神のみ旨によって起こったことと、敬虔かつ従順に信じ納得したことであろうか。

神は人に幸いをもたらすことがあっても、禍を強い苦しめ、嘆きを与えるはずがない。

なぜ自分たちの子どもらだけが殺されねばならないのか。

この矛盾と思われる神の業の前に、親たちの嘆きはいかばかりのものであったか、筆舌に尽くせないものがあったであろう。

このような神の矛盾と思われる事柄を、聖書は不問にしたり隠蔽したりすることなく、限りなく残り続けていく記録の中に書きとどめているのである。

そして聖書はこれを解釈し、予言者エレミヤを通して語られた予言が成就したのだと言う。

予言が成就したと言うことは、この出来事が偶発的な出来事でも、成りゆきによって起こったということでもなく、歴然とした神の発意の出来事であり、神の計算づくの御旨なのだということである。

したがって、ますますわれわれには愛の神の業としては理解し難いのである。もっと違った方法があってよいはずである。

と、ここまでペンをすすめて、ふと気づいて愕然とする。

神に対して不平たらたらの不信というか、自己中心、人間中心的な考えに支配されている下劣にも愚かな自分を意識する。

苦境に陥っては、思いを一点に集注して視界を狭め、多角的に物事を観ることができない。

キリストの誕生は、神の絶大なる賜物である。

あのキリスト誕生の時、当方

の博士たちが、はるばる遠い道を黄金、乳香、没薬を携えて、イエスを拝しに来た。

このことは大いなる賜物に対しての感謝と喜びの表現であり、栄光の神への讃美である。

捧げるという事は、至善の幸いを求めるために行う善行とか、作善の行為ということではない。

捧げることは、全て善きものが神から与えられたこと、そしてすべてが神のものであるということへの信仰の告白である。

ここでまた反省を促される。エルサレムの男の児らの死は、御旨に従う事と殉教に等しい生命の捧げものと思う。しかしこの解釈が正鵠を得ているか否かは別とし、自分に痛みを感じない、他人の行為への解釈である。

果たして自分の信仰の行為の決断的要素となっているのか。多少の捧げる行為があったとしても、それで自己を浄化し、信仰の深みを観たかの様に錯覚し、自己満足や独断に陥っている。

神に対して矛盾よばわりする我々自身、まさに自己撞着と矛盾の中で、神の恵みの賜を受けているのである。

福祉の土

施設長　今関　公雄

ある施設長が、福祉社会としてのヨーロッパを視察し、帰国後の体験発表で、やはり日本とは「福祉の土」が違うと述懐されていたことを思い起こします。

立派な樹木や美しい草花が育つためには、何よりも肥沃な土壌が必要であります。しかも一部の狭いところに留まらずに広く深く分布していることが望まれるところです。

このことは、福祉施設と地域社会のあり方をも示唆しているでありましょう。養護施設の創設に関わり、開設以来七年半を経過する過程で、「福祉の土」の言葉は現実感を増しています。

この時、福祉の原点を示し続けるドイツの障害者の町ベーテル（神の家）での実践逸話は大いに参考になるでありましょう。その要旨は次の如くであります。

ある時、大財閥から膨大な額の寄付申込があったが、丁寧にお断りをしたとのことです。その理由は、福祉施設というものは「貧者の一灯」によるたくさんの善意によって支えられることが大切であり、余りに目立ちすぎる寄付は遠慮するとの考えであります。

もし財政面だけに注目するのであれば、まことに勿体無い話であります。しかしここには、福祉施設などの福祉活動は、多くの支えという基盤の上に成り立つとの福祉哲学が表明されており、我々関係者には刮目に値するものであります。

私は、このエピソードを知らされた時、まさに〝福祉の土〟の違いとその底の深さを示され目を覚まされた思いがしました。このことは、巨大な峰としてのベーテルの福祉施設が、広く豊かなすそ野によって支えられていることを意味しています。

かえりみて、日本の福祉施設の実状はどうでしょうか。私の知る範囲では、創設者を始め少ない関係者で孤軍奮闘して、支える裾野が狭く弱いと言わざるを得ません。

一方、福祉施設が仲立ちとなり、福祉の土づくりが推進されることも事実でありましょう。光の子どもの家の場合、開設時困難な洗礼を受けましたが、一面で「雨降って地固まる」の貴重な経験をしました。

このことは、福祉風土を再考させ、「共に生き、共に育つ」地域社会を志向する過程で、多くの地域住民や一般市民が啓発され、福祉施設のよき理解者と暖かい支援者が生起することともなりました。

救い主イエス・キリストのご降誕のクリスマスを迎えます。聖書は「暗闇の中に歩んでいた民は大いなる光を見た。暗黒の地に住んでいた人々の上に光が照った。」（イザヤ書九・二）と告げます。救い主の誕生は暗きに光をもたらすとして描かれます。併せて、八度目の歳の瀬を迎え、変わらぬご支援要請の心苦しさを覚えつつ、同時にたくさんの方々に支えられている光明を実感する季節でもあります。

エッセイ

狸

中島　睦雄（県立高校教諭）

狸が現れた。しかも、私の家の中にとつぜん入り込んできたのである。六月初旬の或る日、夜明け頃だ。その狸は、猫専用の出入り口から猫の餌を食べに入ったらしい。そして、その帰り道で猫と睨み合いになっている所へ、娘が起きて行った。いつもの黒猫がきていると思って娘は「あんただあれ？」と言ってそこに腰をおろした。すると、人間の威を借りた猫が急に勢いづき、部屋中おっかけっこの大騒動になってしまった。しかも狸は、あっちこっちへ逃げ走りしながら、大小便をいたるところにふり撒いたのである。そして、とうとう廊下の突き当たりの簞笥と壁との間の狭い空間に、頭からもぐり込んで動かなくなってしまった。太いしっぽをこちらに出して。、らんらんと輝く緑色の目でまわりの動きをうかがっている。しかし、こちらは狸を捕まえようとする気持ちが全くないから「おい狸汁にしちゃうぞ」とか「早く何かに化けちゃえよ」などと冷やかしていた。隣に住む弟の家族も四人うち揃って見物に来た。みんないい加減にふざけている。「良いえり巻が出来るね」「狸汁はみそ味か、醤油味か」などと、狸が気絶でもしそうな事を言う。

私たちは雨戸を開け、狸がいつでも逃げられるようにして、それぞれ学校や勤めに出かけた。その後、いつの間にか狸は立ち去ってしまったが、おみやげに例の狭い場所に、どっさりと大便を置いて行ったということ。

私は、この珍事を人に話したくて仕方なかった。勤め先で四・五人の話の中にいる時など、狸の話を持ち出すと、私が必ず話の中心になれた。それはまるで、ある貴重な体験を持つ子どもが、仲間内で少なからずの優越感に浸れるのと同じ様な、密かな快感であった。立場を変えると、狸は狸の方で、間の抜けた人間共を翻弄した武勇伝を、仲間に言い触らしているという事になるのかも知れなかった。

それにしても、関東平野のど真ん中にあるこの家に、なぜ狸が出るのか分からない。本来狸の住むべき山のあたりの乱開発によって追われたのだとか、戦後の植林の失敗によって狸の餌がなくなったのだとか、いろいろな原因が考えられよう。が、しかし、原因はなんであれ現実にここに狸がいるということは、この辺にとっては極めて珍しいことである。

そのうち、狸特有の〝ため糞〟といういつも決まって糞をする場所が見つかったり、家の北西にある水塚と呼ばれる高台の方に、はっきりとした「獣道」があるのを見たりすると、やっぱりこの辺に狸が住んでいるという確信が持てた。その上、用事で納屋に入った時、がさがさと動く狸と、ぴいぴい鳴く仔狸の声を聞いたことによって、狸が、しかも家族で、納屋の中に住んでいるという証拠がえられた分けである。

こうなってくると、こちらもいつの間にか狸と同居しているかのような気分になってきて、だれかれかまわず狸の話をするのはやめようと思うようになってきた。彼らの上にいつ、どんな危険が迫ってくるか分からない。文明の利器を持った、地上最強の動物たちがうようよしているからである。

次第に気候が暑くなってきた。家の前方も、狸の住む納屋の周りも青々とした雑草に覆われた。その頃になると、窓から十五Mほど離れた生ゴミの捨て場に、日中でも時々狸がきているのを目撃するようになった。緑色の草の中に、黒っぽい狸が右に左に動いて、食べ物を漁っている。しかも、雌雄と思われる二匹が交互にやってくるのだ。

私たちは、狸の家族に対して、すっかり近親感を持ってしまっている。しかし、親狸しか見ていない。何匹か必ずいるはずの仔狸については、その鳴き声だけしか聞いていない。

そのうち気候が涼しくなり家の前方や納屋の周りが草紅葉で満ちる頃になれば、そこにきっと狸の親子の遊ぶ姿が見られると、今から期待している。

くりすます

今年のクリスマスには、ぜひ、プレゼントより、父にきてもらいたいと思っている。

高1. 匠

今年もみんながクリスマスを祝福できるように。

中2. 逸郎

サンタさんへ
いい子にするからステキなプレゼントちょうだいね。

小3. 亜季

小2. 悠子

ページェントをぼくはがんばりたいと思います。

小4. 耀也

おめでとう

イエス様おたんじょう日おめでとうございます。まいにちネ申様のことをおいのりしています。

小3 多歌音

イエスさま、おたん生おめでとうございます。神さまもずっと私達を見ていて下さい

小5. 紅子

小1. 梅子

かみさまへ。へいじえんてをやるのでてんからみていてください

小2. かずし

イエスさまはうまごやでうまれてさびしくなかったかなあ。ぼくだったらさびしかったかもしれません。

小3. 高雄

虹の国から

日ようさんかん

二年生　おおさか　ちさ

日よう日は、日ようさんかんで、がくしゅうはっぴょう会です。たくさんお父さんやお母さんがきていました。くらちゃんも来て見ていました。やるまえに、一人で言うところがちゃんとできればいいなあと思いました。

とうとう私たちのばんが来ました。ぶたいにのぼったとき、ちょっときんちょうしました。おわったときに、やっとおわったと心の中でほっとしました。

でもわたしはいっしょうけんめいやったので、しゅくだいがないことになってとてもよかったです。

そうゆうところが、めがみのかん田先生だと思いました。

まなざし

佐藤家

「足が痛いよー、痛いよー。」この数日、学校から帰って来ると決まって泣きそうな声で訴える。

小学校で、四年生以上が参加する駅伝大会のための候補選手に選ばれ、早朝、放課後はもちろん、休み時間まで練習に当てているという。佐藤家からは四・五年生全部の四人が候補選手に選ばれた。

五年生の紅子はそのなかの文字通り紅一点である。今年は格別練習が厳しく、健康で体力もあり、力の出しどころに困っているような潔君などと違い、学年でもひときわ小振りで、体力も、入学の頃は二キロ余りの通学路を心配したほどの子である。疲れ方も他の三人より酷い様子が見て取れる。もちろん、練習量や方法がこれまでをしのいでいるようで、みっちり練習した休日の翌日は、みんな筋肉痛を訴えるが、快復は紅子がいちばん遅い。

「そんなに痛くなるほど走らなくてもいいよ。自分のペースでやればいい。体を壊したらスポーツの意味はないよ。」と、出来るだけ優しく話してやるのだが、勝ち気な紅子は、誰にも負けないほど頑張るようだ。言葉にはしないが選手になりたい思いがありありなのである。側にいる四年生の將士が、「僕は一番遅いDグループでもいいんだ。自分のペースで走るんだから。」と、のんびり言う。

「何言ってるの、あなたはもう少し負けん気になればもっとランクを上げられるのに。」と、心のなかでイライラしく思いながらも、「そうだよ紅ちゃん、自分のペースが一番だよ、あんまり無理はしないでね。」と言うと、「もう決めたんだから変えられないの！」と、思いとは逆にファイトを燃やして決意を表現する。

紅子が選手になる確率はひいき目に見て三割。毎朝走って登校しても平気な擢也君や潔君に勝るはずがないのだ。それでも、こんな思いで走っている候補の全員が、どこかで成果を発揮する機会が与えられないものかと思うこの頃である。

秋元　光代

子どもたちの季節

「魔法の杖」

仙道家

ある日の就寝前のひととき、菅原先生に子どもたちと私はこんなことを質問された。

「もしも何でも願いがかなえられる魔法の杖があったら、どんなことをお願いするかな」

「たくさんはダメだよ、何か一つだけだよ。」

ひとつだけ。これは実に難しい。欲張りな私はあれこれ考えた。「きれいで大きなお家も欲しい、車もいいな。外国にも行ってみたいし、それともスラッとスマートにしてもらおうかな・・。」安易で愚かな私はこんなことしか思い浮かばなかった。

しかし子どもたちは違っていた。

いつも私に叱られてばかりの亜紀は、「倉ちゃんに叱られないように、いい子にして下さいってお願いしよう。」と言った。いじめられっ子の悲しい願いに、いじめっ子の側の私があぶりだされた。

母の行方が分からずに、父は再婚して新しい家庭を築いていて、自分たちがどっちに属するか定まらない千沙は、じーと考えた。やがて、オズオズと、「お父さんとお母さんと勇君と私でどこかに行けるようにお願いしたい。」と言った。

親子などの家族で出かけることは、普通であればごく当たり前のことである。教会学校の行き帰りや、外出の折の電車などで、いつでも見ているそんな風景を、この子はどんな思いでながめていたことだろうかと、胸を突かれた。

千沙にとって、いや、光の子どもの家の子どもたちにとって、親や家族とともに過ごす時間は、一回しか使えない魔法の杖を使ってでも実現したい悲願なのである。

私に魔法の杖があったなら、いじめられっ子の亜紀が胸を張れるような頼もしい味方になってやり、年にたった一日でもいい千沙の願いを叶えてやりたいと、心から願った。

倉沢　智子

原田家日記

休日の翌早朝、左姉妹のロッカーの上に姉、多歌音からの手紙が無造作に置かれていた。製作好きの姉妹で、その日も空箱や木ノ実、セロテープがベタベタの「作品」が所狭しと並べられ、チラシの裏の手紙は気をつけなければ見過ごしそうだ。学校に提出する作文だったら、小さい「っ」が抜けていたり、誤用されている言語の添削をしてしまいそう。しかし彼女の想いや優しさ、不安な心はじわじわ伝わってきた。「おてがみありがとう」に始まり「どうしておでかけしてしまったの？しんぱいしたよ」と続く。難しかった宿題、友だちとした喧嘩、お利口だった妹、前後は不明だが、「どうして私がしかられるのよ」と、突然憤りも行間から躍り出す。書きたいだけ書いて、後は妹に本を読み聞かせ、妹の分もお祈りして眠りに入ったのだろう。

「お出かけ」とは私の休みのことである。学校へ送りだした後出かけることもある。休める状態にする準備であわただしくなりがちだ。そんなことで滞りがちだったメッセージのやりとりが再開したのは姉妹からの返事を見たからだ。つい面倒な時は、出しっ放しの折り紙から一枚抜き取り、花やネコなどを切り抜いて、その裏に一言メッセージを書き添えて終わり。かけた時間は何分か・・。だが、翌朝、妹の福子は宝物のように手にして、「これ信恵さんが作ったの？。すごーい。」と喜んでくれる。なにか、とても申し訳ない思いになりつつ、お留守番してくれたことのお礼を言う。

「にこにこしたお顔で待っててね」と何回書いただろう。

妹も学童となった今も笑顔の素晴らしさは健在だ。しかし、嬉しいことだけが続くはずはない。立ち向かうには困難な課題が増え、涙が出そうな時も多くなるだろうことは時を経ずに明らかになる。

にこにこ笑顔が輝くときが一瞬でも多い時を重ねるために、関わる側の私ももう一回り大きくならなければ・・。竹花　信恵

現場から

いつでもいっしょ！（Ⅲ）

五来　淑子

朝夕だけではなく寒さがまんべんなくなってきて、子どもたちへのクリスマス・プレゼントを何にしようか考えはじめています。夜などは子どもたちの手が思いの他冷たく、「いっしょに寝て、あっためて！」などと、甘えた声で私を誘います。

そんなある夜、「今日はお手紙を読む日です！」と言いながらロッカーから手紙の束を持ってきた小学2年の悠子。「なに、そんなにたまったの？」と驚いて、1枚づつ開いて見ました。

ここで五年目、私より先輩の悠子は、何度ロッカーの整理をしても「これはとっておく！」と、きちんと袋に入っている手紙は彼女の宝物の一つです。誕生日やクリスマスのカード、友だちや祖父母からの、あるいは私がお出かけの時に書いておいたものや、出先からの手紙までちゃんと残してあります。

「あっ、これ田村先生からのだ！なつかしい。」と幼稚園時代を思い出し、「四才おめでとう！」という誕生日カードに恥じらったり・・、楽しい時間になりました。一枚づつ開く度に、書いて下さった方の心が伝わって、暖かな気分になりました。

三才の誕生日をこの家で迎えるまでの間、本当なら母親の腕を独占できたはずの三年間は、父母の家、親戚から乳児院へと、落ちついて生活することが出来ず、関わる大人も次々と変わりました。そんな環境が与えたダメージの重さ、大きさは計りしれません。人間関係でたくさんのトラブルが発生し、大きな瞳に自分以外の人が映らず、小さな心に入ってくれる者もなく、情緒を刺激することども少なく、だから、誰にも壊されたくない自分だけの世界をしっかり持っている子どもなのだと思います。

そんな悠子とする生活のなかで、同じ思いや感じあうことなどの経験を共に出来たらいい。さまざまな気持ちを共感できたらいい・・。そんな時間を意識して関わってきました。

種を蒔いてお花を育て、調理の小さなお手伝い、洗濯物を干し、絵本を見たり・・と、悠子とだけの時間を大切にしてきました。

お互いが楽しく快い時間だけなら幸せなのですが、体が向かい合いスレ違ってしまうことの何と多いことか・・。三年の年月を経てなかなか成長しない私と過ごしている悠子が、私を超えてしまいそうに大きくなっていくのです。

自分のものは人に貸さない。うんと強いその思いも、妹の詩美と言う例外が出来、二才下の俊君の誕生日に、「私もプレゼントあげる！」と、自分の大事なおもちゃを袋に積めて「手紙も書いて上げよう、絵もね！よろこぶだろうな。」と夢中で準備をしていました。

小学校入学の頃からだんだんまわりの友だちに心が動き出し、級友の話をよくするようになりました。しかし、仲良くしたい気持ちの表現がよく分からずにちょっかいを出しては嫌がられ自分の言い分だけを聞いて欲しかったりたくさんのトラブルをつくってしまいます。

トラブルや失敗は出来るだけ小さいうちにたくさん経験した方がよいといわれています。悠子にとってもきっと・・。

実にたくさんの人々が悠子に関わって下さっています。お手紙にこめられた一つ一つの言葉を、悠子はきっと心に残し、忘れたくないものとして大切にとってあるのだと思います。

気持ちが通じない、思いが伝わらないと、何回嘆いたことでしょう。そんな焦りや苛立ちとは無関係に、悠子の心が広がって私の固い心に伝わってくるのが確かに感じられるような時がたくさん増えてきました。

今年もまた、悠子たちとクリスマスを迎えます。ページェントでの素敵なマリヤ役を夢見る悠子に、私が何故ここにいるのかという存在のすべてをかけて伝えなければならないメッセージに心を集めている日々です。

養護メモ 40

はたらくその一

菅原　哲男

養護施設光の子どもの家は、人が育つために不可欠な家庭を失った子どもたちに、限りなく家庭に近い環境の中で、欠落した家族との関わりを限りなくそれに近い人間関係を保障して養育するために建てられた。

先年の関東ブロック職員研修会で坂巻直之指導員が、児童処遇と勤務条件を扱った分科会で発題した。その折のついてのやりとりで、「施設が職員の福祉を追求する場になってしまっていいのだろうか」という意味の発言をしたらしい。

これについて、つい先日栃木県のある養護施設長さんから人づてに「週四〇時間労働体制が叫ばれている時に逆行するものである」というお叱りをお受けしたらしい。

働く者の条件をよりよくしていくことは、特に経営管理の責めを負う者にとって決して怠ってはならない事である、と確認するものである。

さて、約十年前に「子どものための子どもの施設」を建設し、その目標の達成のためにする運営を、という願いの実現のために養護施設「光の子どもの家」の計画を始めた。そして八年前に同じ養護施設関係者からの醜い策謀に満ちた妨害を洗礼代わりに開設し現在に至っている。

この間、たくさんの祈りに支えられ、願いを一つに出来る仲間たちと共に「子どものための子どもの施設」運営を中心に据えて努力を継いできた。

この目標は仲間たちの懸命の努力にも関わらず未だ端緒についたばかりで、その道の遠さばかりを確認させられている。

光の子どもの家は、管理棟を除いては「働くための職場」という概念を徹底的に排除して設計された。たくさんたてたプロットの一つに「職場で子どもは育たない」がある。何処に立っても子どもの生活場面全体は見えないし、子どもの生活場面までに二枚以上の戸、ドアなどの仕切を通らなければならない。

五名以下の子どもを一人が担当し、二人の担当が二階建ての子どもの家に住んでする責任担当制という方法を採用し、何もかも初めてという職員たちとそろそろと始めていったのである。

責任担当といっても休みは保障しなければならない。指導員一人の他に休みの代替保母を一名加えて、一軒の家に二担当（二世帯）十名以下の子どもと四名の職員が暮らすことにした。

ところが、取り組みを続けていくうちに、代替のつもりで配置した保母に担当を持たせなければおかしい、と職員会議などで話されて、代替だとお手伝いさんみたいだとその人たちも言うので、不安定で一対一の関係がとりわけ必要な子を一人担当してもらった。だから五名、四名、一名を担当する三世帯が一軒の家で生活することになったのである。そうこうして一年ほど過ぎた頃、「一人っ子は育てにくい」と言う話が出てきて、それはそうだろうと二名を担当する者が現在まで二名いる。

働く者の条件をよりよいものにしようと配置した職員だったが、一人が担当する人数を減らす方を職員たちが選んだ。当然保母一人当たりの事務的な量は減ったが、朝から晩までの労働は断続勤務という形態になって現在まで推移してきた。

一人当たりの担当人数が減少し、担当者と子どもの関係は密になり、労働条件の改善が子どもたちの利益に還元されている。

子どもたちが持っている苦しみを、私たちは引き受けることを決意したのである。その決意に基づく毎日の関わりが「はたらき」と言われるものなのである。

次年度の人事に関して毎年九月に退職予定者の申告を促す。

結婚を予定し、今年退職かと思っていたが続けている保母が、来年は無理だろうと思っていたが申告がない。十月半ばに確認した。「〇〇ちゃんが入学するまで、もう一年ここにいさせて下さい。結婚相手と喧嘩しそうになりましたがよく話し合い理解してもらいました。」と美しくほほえんだ。（この項続く）

日誌抄

七月一日～九月十五日まで

七月一日　栗原さんよりいつものお励まし。ありがとう。
二日　慈恵看護学院生見学。
三日　加須市矢沢玩具店よりおもちゃをたくさん。感謝。
五日　桶川市の向後さん、原田家のみんなを夕食にご招待。
六日　しずくの会、草取り、環境庁より寄贈された樹木を植えで下さる。感謝。
七日　鎮守のおまつり。小学生が御輿をかついで町内をねり歩く。ワッショイ！。
十日　国連の職員を長く勤められた稲垣和子さん、林純子前荻窪教会伝道師と共に来訪。見学と歓談のひととき。
十一日　大谷さんよりレタスをたくさん。ありがとう。
十三日　県立衛生短大生見学。
十四日　町内田中電機より古着をいただく。感謝。
十五日　山野井さん生活物資を。
十九日　栗橋の割烹萬屋より土用の鰻をみんなに。感謝。
二十日　明日からの夏休みへの思いを披露して、バーベキュウを楽しむ夏休み前夜祭を。
二二日　夏休み行事第一弾「虹の会」が八ヶ岳へ。23日天狗岳を全員が征服。バンザイ。
二七日　夏休み行事第二弾「夢の会」の小学一年生と幼児秩父の伊豆ヶ岳へ全員登頂。
二八日　上町俊（五才）入所。仙道家岩崎が担当。
二九日　この日から30日まで東大宮教会中・高生キャンプ。
三〇日　夏休み行事第三弾「夢の会」の小学一年生四人が去年難渋した奥秩父の霧藻ヶ峰を軽く極めて民宿「大滝」へ。
八月一日　大沢商店よりジュースをいただく感謝。
二日　日本キリスト教団東大宮教会夏期学校が赤城高原で恵まれた三日間。感謝。
六日　夏期行事第四弾「GOGO会」八ヶ岳赤岳登頂と山頂小屋泊行。虹の会と同様に株式会社「フリック」の山荘提供のご支援を受けて。鎖にしがみ田中さんを助けての快挙。山頂からの夜景、日の出などを初体験と感動の四日間。感謝。
十二日　お盆帰省がピーク。原田家は井上若子さんのご協力で宇佐美の海へ。佐藤家は都立養護施設船形学園のご協力で館山の海へ。仙道家は養護施設城山学園のご協力で湯河原の海へ。それぞれ帰省できない子どもたちとの三日間。高校生二名と中学三年の睦男がそれぞれの家の留守番。
十七日　牛田さんよりアイスクリームをたくさんオイシイ！
二一日　中・高生六名の「八八会」青森県弘前学院聖愛高校嶺尚先生を中心にする教師の有志が支える会を結成しご招待。五日間の青森研修旅行を。
二六日　栃木県烏山町社会福祉協議会三九名が見学と交歓に。
二九日　「はむこ会」より扇風機などをたくさん。感謝。
三〇日　江森へやーサロンの江森誠次さんのお葬式に全員が参加してご冥福を祈る。夏休みさよならパーティを。
二学期へ身構える。
九月一日　二学期開始。
十三日　向後さんの夕食会。
十五日　加須市警察署長杯剣道大会で三年生中山、四年生奥寺、五年生佐藤、六年生安田、団体黒川が優勝。（くら）

反射光

クリスマスの祝福をお祈りします☆おかげさまでこの年も無事に終わろうとしています。ありがとうございます☆子どもたちの成長は年を重ねる毎に老いていく者のエネルギーを全部吸収しているかのように錯覚してしまう程です☆子どもの権利条約がPKO法案のゴタゴタで、今回も佐川事件で流れそうです☆子どもの権利が国際的に確立されようと努力されている時に恥ずかしい限りです☆この国でも批准されるだろうことは確実です☆子どもの権利が確立されていくと、私たちの仕事も大きな変革が要求されます☆病院のカルテや学校の内申書類、公共団体の個人情報などの開示が裁判で争われてきました。養護施設でもケース記録や養育計画なども子どもや家族と一緒につくり、納得した暮らしにしなければなりません☆また、自分が住む場所の選択の保障なども急務です。入れられ、与えられる福祉からの脱却が来る世紀へ向けた私たちの取り組みの指標となります。（哲）